

カミュ「客」におけるアラブ人の表象 ーアラビストの視点ー

岡 崎 桂 二

（平成18年3月30日 提出）

カミュ（1913年～1960年）はその文名の高さに比して、小説家としては極端に寡作である。彼の主要作品には、『異邦人』、『ペスト』、『転落』の3作と短編集『追放と王国』があるだけで、これ以外には、死後未完のまま出版された『最初の人間』のみである⁽¹⁾。しかし『異邦人』をはじめ、これらの作品の過半は出身地アルジェリアと深い関わりを持ち、アラブ人が登場する。しかも作品中のアラブ人の描かれ方や、アラブ人とフランス人との関係は当該作品全体の特徴を決定する要素を成している。本稿はカミュ作品中、最も鮮明にアラブ人が描かれていると思われる『追放と王国』所載の短編「客」を、アラブ文化の観点から解釈しようとするものである。従来、作品中のアラブ人に関しては、主人公のダリュの一方的な視点からの解釈が多く、男を無知で野蛮、長い植民地支配により自律的な行動ができない人物と解されてきた。しかし、アラブ人の行動様式や思考パターンから男の行動を考察すると、全く別な姿が浮かび上がってくる。そして、この作業を通して、「客」には異文化接触による相互理解の不備、という従来見過ごされてきたテーマが込められていることが明らかになる。

キーワード：カミュ、「客」、『異邦人』、アラブ文化、異文化接触、ハディース

第1章 王国

『異邦人』中のアラブ人は全員固有名を持たず、個々人の表情や感情は描かれていない。また主人公のムルソーはアラブ人と彼らの住む世界に対して全く無関心である⁽²⁾。そして『ペスト』では、冒頭、新聞記者がアラブ人の健康状態のルポに来たと、オラン来訪の意図を医師に告げる場面があるにも拘わらず、以後、アラブ人は描写対象の外に置かれてテキストから完全に姿を消す⁽³⁾。他方、『追放と王国』では、収録されている6編中、4編がアルジェリアを舞台にし、アラブ人が登場する⁽⁴⁾。わけても「不貞」と「客」において、カミュ作品において初めてアラビア語を話すフランス人が登場し、またアラブ人は名前こそ与えられない

が、克明にその表情が描かれている。そして、「客」では、アラブ人とフランス人との交情を軸にストーリーは展開する。かくして、カミュ作品中、「客」において最も鮮明にアラブ人が描かれ、作品理解においても、アラブ人は要の位置を占める。

本稿は、カミュ作品におけるアラブ人の表象に関し、最も多くの情報を提供し、またアラブ人理解が作品理解に直結している「客」を対象に、従来見落とされてきたアラブ文化の観点からこの作品を解釈しようとするものである。『異邦人』が精神分析学、心理学、政治学、物語論、イメージ分析、等様々なディシプリンに即して解釈されてきているように⁽⁵⁾、「客」に関しても多様な解釈

岡 崎 桂 二

が提案されているが、多くは主人公ダリュの一方的な視点からなされたもので、アラブ文化の観点からすると見当違いな論も見うけられる。本稿は、アラブ・イスラム文化の見地から、これまでの研究、解釈の誤解を正し、作品理解の一助とした⁽⁶⁾。

「客」(L'Hôte) はアルジェリアの荒涼とした山間部の小学校を舞台に物語は展開する。この僻地の学校教師、ダリュ、は全くの孤独の中で生きている。地理的、精神的な意味においても、また知的、社会的、経済的、な意味においても。ダリュはフランス本国はもとより、首都アルジェからも遠く隔たった小村で、家族も持たず、また、話相手や知的会話を交わすべき同僚もなく、たった一人で教師を務めている。学校は沙漠の入り口に面する高地に位置し、周囲は石ころだらけの土地ゆえに農業に適さない。おまけに飢饉に見舞われたこの村で、生徒やその親達は飢餓に襲われている。さらにまた今は、突然の大雪により、生徒たちはここ数日間登校できず、ダリュはまったくの孤独の中に置かれている。そこに旧知のフランス人憲兵が一人のアラブ人を連行してくる。憲兵はダリュに対して、明日、警察署がある隣村までこのアラブ人を引き渡しに行くようにと命ずる。彼はダリュの応諾をえないまま、アラブ人を残して立ち去る。以後、ストーリーは残された二人、つまり、フランス人教師とアラブ人犯罪者、をめぐって展開し、緊迫感に満ちた心理描写が行われる。生来のヒューマニストたる教師にとって、犯罪者を連行して警察に引き渡す作業は自己の信義に悖る恥辱的な行為であるが、他方、その作業を拒否することは、同胞フランス人全体への背信行為となる⁽⁷⁾。事実、犯罪者の護送を拒否したとき、憲兵は長年息子同然に接してきた男の態度に立腹する。まして、いまや、アラブ人が蜂起しようとしている非常事態であり、憲兵が説くように、たとえ職務外の行為

であったとしても、同じ植民地に生きる者として、フランス人はみな一連托生の身なのである (Nous sommes tous dans le même sac.)⁽⁸⁾。

このようにして、孤独であった世界に、突然、外部からの侵入者たる客が侵入してくる。その存在により、フランス人教師は自己の社会的地位、否、自身そのものの存立基盤が試されるようになる。ダリュは植民者側の一員としてアラブ人を護送するか、あるいは、自己の信念に従って、彼を解放するのかの二者択一を迫られている。自己の生き方、アイデンティティを問われており、これまで迫られることがなかった決断を明確に下さなければならない。

ダリュの生活はこの様に描かれている。

わずかな持ちものと、この厳しい生活に甘んじ、人里離れた学校でほとんど修道僧 (moine) のように暮らしていた彼は、この悲惨な窮乏を前にすれば、その粗塗りの壁、その狭いソファー、その白木の棚、その井戸という生活でも、さらには水と食糧とを毎週補給してもらうことで、みずからを王侯 (seigneur) のように感じていた。そして、前触れもなく、雨という気候の和らぎもなしに、いきなりこの雪が来た。土地柄は、かように、生きるにつらかった。人間すらいなかった。いたところで何をどうすることもできなかったのだ。しかしダリュはこの生まれだった。よそへ行けばどんなところでも、彼は追放を受けたように (exilé) 感じた⁽⁹⁾。

冒頭で、このようにして短編集のタイトルでありキーワードでもある「王国」と「追放」が用いられている。但し前者は王侯という語を介しての間接的な表現に止まっているが。(英訳では lord の訳語が与えられている)。そしてこの 2 語は、

カミュ「客」におけるアラブ人の表象

寒村の小学校教師の生活を端的に象徴する作用を果たしている。その暮らしぶりは、アラブ人を連行してきた憲兵のバルデュッシから見れば、「お前ほどの猛者なら、20キロの道のりは何でもない。それで仕事は終わりだ。お前はまた自分の生徒に会えるし、結構な暮らし (la bonne vie) がつけられるというわけだ」と皮肉られ、羨ましがられる程の充足感に満ちたものである⁽¹⁰⁾。

ダリュはこの小さな王国の支配者であり、原住民の生殺与奪の権利を手中にしている。本国フランスから送付されてくる援助物資を一手に握り、彼から分配されるこの僅かな糧食で原住民たちは飢えをしのいでいるのだ。また教師としてかれらの文化と思考とを支配している。黒板の上には本国フランスの地図が描かれており、フランスを貫流する4大河が4色のチョークで描き分けられている。おそらく、ほとんどの生徒は生涯この地図とは無縁の生活を送るであろう。かれらはただ知識として宗主国フランスの地理を学び、その知識を通して、植民地住民の一員であることを認識させられていく。

ダリュはこの小王国の領主である。しかし、その領地は周囲とは孤立しており、彼にとって版図外での生活は不可能なものに思えた。植民地生まれのフランス人（ピエ・ノワール *pied noir*）が置かれた典型的な姿としてダリュが描かれている⁽¹¹⁾。この地で生まれ、育ち、この地でしか生活することができない。それはダリュにとっての宿命であり、本国フランスへの転勤を拒絶し、植民地から脱出する機会を自ら放棄したマルソーの立場とは全く相反するものである⁽¹²⁾。ダリュは自然と一体化した孤立した世界に住み、同じ本国政府任命の吏員であるバルデュッシらが属するフランス人社会との関係を極力避け、同時に、この王国の住民以外のアラブ人とも接触を絶っている。彼は孤独を求めて寒村の教師を志望したが、任命さ

れたのはこの絶対の孤立社会であった。しかし、住みつくうちに、ここが王国に変わったのである。

また修道師の1語は、倫理面での厳格さという彼の内的性格を暗示させる。事実、ダリュがアラブ人にとった最初の行動はヒューマンなものであった。教室内に連行され蹲っているアラブ人の立とうという意志を制して、ダリュはわざわざ跪いてその縛めを解いてやり、熱い紅茶を差し出したのだ。

その反面、アラブ人の犯行内容を知った時に、ダリュは激しい感情を露にする。アラブ人は食料の貸借が原因で徒弟を鎌で斬殺したのである。憲兵からこの事実を聞かされたときに、ダリュはその犯行の当事者のアラブ人のみならず、全人類が共有する「どす黒い本能」を憎悪する。この暴力に対する嫌悪感は、全人類の愚かさに対する苛立ちとして説明されている。彼は執拗にアラブ人に犯行に至った経緯の説明を求める⁽¹³⁾。後程、この倫理的潔癖さが、彼を悲劇に陥れることになる。カミュはダリュを兄弟愛 (*fraternité*) の持ち主として描き、さらに暴力を嫌悪する博い人類愛の所有者のイメージを読者に強く印象づける。ダリュのこのような倫理感がバルデュッシの命令を肯じない唯一の理由である。

憲兵バルデュッシはダリュとは古くからの知り合いであるとともに、また憲兵として法を執行し、命令遵守を命ずる「父」の役割を果たしている。彼はダリュを常に「息子 *fils*」と呼びかけ、自己と同質社会の一員としてダリュを遇している。しかしまた、法の執行人として、その命令に従わないダリュへの苛立ちを隠そうとはしない。そこには父親に反抗する息子に対する近親憎悪の感情が混ざっている。バルデュッシは『異邦人』におけるマルソーの友人レエモンの役と、彼を裁く予審判事、教誨師、の役を同時に演じる、一人二役を割り当てられている⁽¹⁴⁾。そしてマルソーをアラブ

人との係争に巻き込んだレエモンと同じく、憲兵はダリュを王国から一般社会へ引き込む役割を果たす。レエモンは手紙の代筆を依頼することで、憲兵は犯人連行を命令することで、主人公を現実社会、そこでは自己にとって好意的な人間のみならず、反抗し、敵対する人物も住む、に導入していく。その要請に対して、『異邦人』では面倒くさかったから応諾し、「客」では人間性から拒絶した。

第2章 客

それでは「客」において、アラブ人はどのように描かれているのか。

石ころだらけの山道を、男は両手を縄で縛られ、あたかも動物のようにして馬上の憲兵によって引きたてられて来る。「ダリュは最初、並はずれに大きい、張り切ってなめらかで、ほとんど黒人みたいなその唇しか見なかった。しかし鼻はまっすぐで、暗い目は熱っぽい」という第一印象を受けた⁽¹⁵⁾。ダリュはアラブ人の目と唇に強い印象を受ける。男の目は常に「熱っぽく fievreux」、唇は「分厚く gros(se)」「動物的 animale」であった。さらに男は「不安」であると同時に「反抗的」な態度や表情を示していた。憲兵が託したこの「囚人」に対して、ダリュは苛立ち、男が犯した馬鹿げた罪に憤激する。

しかし、ダリュは男と二人きりになると、男に食事を供する。小麦粉と油でギャレット（ビスケットの一種）を焼き、チーズ、卵、棗椰子、コンデンス・ミルクを出す。この食事内容は、数日も配給が途絶えるとたちまち飢餓に苦しむ村民はもとより、小麦の貸し借りが原因で殺人を犯したアラブ人自身を驚かせたであろう。日頃の彼らの生活状況からすると、ダリュが男に供した食事は晩餐と称するに値する内容であり、あるいは男には天国でのもてなしに匹敵したかもしれない。しかし

ダリュにとってはただの「飯 repas」に過ぎない。作者は植民地住民と植民者間との生活状況の差違と意識の断絶を、食事という人間の生存に欠かせない基本的要素を通して端的に読者に伝える⁽¹⁶⁾。

食事が済むと、後は何もすることが無い。ダリュは自室に仮ベッドを設えて、男を寝かす。ダリュは見知らぬ殺人者と一夜を共に過ごすことに緊張し、寝付けぬ。やがて男は静かにベッドから起き上がり、部屋から出て行く。やっと厄介払いができ、同時に自分の責任回避ができると束の間喜び、安堵するが、男は再び静かに戻り、眠りにつく。翌朝、ダリュは男の行動に対して、愚劣な殺人を犯しながらも、逃げることさえできない男の愚鈍さに立腹することになるが、全てが夢だ、と自身に言い聞かせながら、まどろむ⁽¹⁷⁾。

翌朝、朝食を終えると、ダリュは男を連れて山頂に行く。男に食料と金を与えて、取るべき二つの道を教える。東に行く町に出、そこには犯人護送を待ちうける警察の本署がある。他方、南の道を数日たどるとやがて遊牧民に遭遇し、彼らの下で安全に身を潜めることができる。ダリュは男に自身の運命を選ばせることで、自分の判断を避け、責任回避を図ったのである。ダリュの説明を聞いて、男は一瞬驚いた表情を見せるが、ダリュは意に介さず、その場を去る。山を下って暫くして振り返ると、男は留置署へ繋がる道を辿っているのが目に入った。そのうなだれ、とぼとぼと牢獄へと辿るアラブ人を見て、ダリュは胸を詰まらせる。男の選択はダリュにとって恐らく予想外のものであっただろう。

人は自由を望み、自ら求めて囚われの道を選ぶものは少ない。あの動物的で、愚鈍とも思われた人物の倫理的行為に、ダリュは打ちのめされる。さらに、日頃の信条に反し、男の要望を拒絶し、また、自己の責務を回避した後悔が襲う。

作者はダリュをさらに追い詰める。学校に帰っ

てみると、自己の「王国」たる教室の黒板に稚拙な文字で「お前はおれの兄弟を引き渡した。必ず報いがあるぞ」と書かれていた⁽¹⁸⁾。このアラブ人の選択と、黒板に書かれた文字は、アラブ人に対する彼の行動を告発し、それまでの彼の倫理的な生き方との齟齬を咎める。

ダリュは王国から追放されてしまった。アラブ人に対する彼の融和的な態度はフランス人からの離反要因となり、またアラブ人を官憲に引き渡したと思われたことにより、アラブ人側からも敵視されるようになった。絶対の孤独に追い込まれて、「ダリュは空を眺め、高原を眺め、さらに、そのかなた海までのびている目に見えぬ土地を眺めていた。これほど愛していたこの広い国に、彼はひとりぼっちでいた」のである⁽¹⁹⁾。

このようにして、緊密に構成され、リアルな描写から生み出される緊迫感に富んだ物語は、後に多くの謎を残したままで終わる。なぜアラブ人は自己の犯罪に対して後悔の念や罪悪感を感じないのか、なぜアラブ人は牢獄への道を選択したのか、さらには、彼には同志がいたのか、なぜダリュは明らかな嘘をついたのか、あるいは、黒板上の脅迫文の筆者は誰か、等々の謎を提示したままでカミュは筆を擱く。それゆえ、発表後、現在に至る50年間に多様な謎解きが行われてきた。

この作品はアルジェリアという地理、植民地という文化風土、の二つの条件と密接な繋がりを持つ⁽²⁰⁾。しかし、アラブの反乱が仄めかされてはいるが、現実の政治とこの作品との関連や、カミュの政治的立場からこの作品を読む立場を本稿では取らない。あくまでテキスト内での作品理解を目指す⁽²¹⁾。そして、作品解釈において「客」の読解者には、この地に生まれ育ち、この地の住民を熟知していた作者カミュと同じく、アルジェリアの地理・風土、アラブ人の思考様式、行動パターンの知識が要求されるであろう。それらを欠く解釈

は作品の意味を誤解することにつながる危険性を孕む。以下に、アラビストの観点から謎解きに挑み、アラブ人の隠された側面を明らかにしたい。

第3章 羊とナイフ

アラブ人の描かれ方をもう一度検証してみよう。アラブ人の護送を要請された時、ダリュは、「いったいあいつは何をしたんだ?」、「フランス語をしゃべるのか?」、「われわれに反抗してるのか?」と矢継ぎ早に、最も気がかりな3つの点を憲兵に問う。それに対して憲兵は、フランス語は一言も話さないし、また反抗しているようには見えないと答え、さらに、家の中のごたごたが元で、羊のように従弟を鎌で斬り殺した、と犯行の様子を伝える。「バルデュッシは自分の喉に刃物を当てて引くまねをした」のだ⁽²²⁾。そのむごたらしい殺人方法は、ダリュに激しい嫌悪感を抱かさせる。しかし、アラブ文化の観点からすれば、この殺害方法は最もありふれたものであり、かつ、相手に最小の苦痛しか与えない方法である。

アラブ人は食用獣を屠殺する際に、その頸動脈をナイフで一掻きする。これは有効確実で、不必要な苦痛を与えない処理方法であり、また神の教えに則った方法でもある。この男は咄嗟に日頃のこのような行動様式に従って行動しただけであり、特段、残酷だと非難すべきものではない。

イスラム教徒には厳格な食物規定が課されており、動物はイスラム教徒の手によって、祈りを唱えられた後、一気に喉下を切り裂いたものでなくてはならない。その様は憲兵のバルデュッシがジェスチャーで示した通りである⁽²³⁾。また彼らは銃器を使って遠方より殺すのを卑怯な行為と見なし、接近し、相手との一騎打ちを男らしい行動と見なす。ゆえに、現在でもアラブ・イスラム圏では刀やナイフを男らしさの象徴と考えると、常時身に付けて誇示する地域もある⁽²⁴⁾。

この犯人も恐らくそのような文化の中に生きる一員であったのだろう。詰問に対して逃避しようとする相手の卑怯な振る舞いに対して、日頃の行動様式に則り、思わず手近の鎌を手にして追いか、衝動的に成敗に及んだものである。アラブ文化の見地からすれば、理解可能な行為であり、特別に残酷な殺害方法でもない。

この殺害方法に関するダリュの激しい嫌悪感の表明の背景には、「暗殺者 assassin」という用語がヨーロッパ・キリスト教徒に与えた恐怖の名残を想起させる⁽²⁵⁾。選ばれた若者は「山の老人」から短剣を授けられ、麻薬吸引により酩酊状態のまま各地に散って行き、要人暗殺を実行する。このようにして作り上げられた野蛮で暴力的なアラブ人イメージが、ダリュの心中に蘇る。

これに関して、『異邦人』で対峙するムルソーとアラブ人の武器にも注意すべきであろう。カミュはムルソーにピストルを与え、アラブ人にはナイフを持たせている。そして通りすがりの相手を太陽が眩しかったゆえに射殺し、後悔を示さぬムルソーはイエスに準えられ、他方、「客」で貧困から殺人を犯したアラブ人は、鎌での殺し方が残忍だとして反人類的行為と見なされる⁽²⁶⁾。『異邦人』同様、「客」においても、アラブ人とフランス人の行動様式、倫理規範には深い溝がある。カミュはこの差違をテキスト内に込めているにも関わらず、多くの評者から見逃されてきた。彼らはダリュと同じ理解しかできていなかった。

一体に、「客」中のアラブ人を無知で野蛮な人間と見なす傾向があり、作者もそのイメージを増大させる描写を行っているのは、先述のアラブ人の人物描写において明らかである。男の口元はぶ厚く、目は熱を帯びており、動物的な印象を与える。それどころか、日本語訳では「こいつ」とばかりかされた訳語が与えられているが、憲兵は男を縞馬 (zebre) と呼んでいるのだ⁽²⁷⁾。さらに質問に

対して「アラビア人は口をあけて彼を見つめた。明らかに、男は意味が分からずにいた」という描写や⁽²⁸⁾、「あえて殺人を犯しながら逃げることもできなかった男（との両方）を呪っていた」ダリュの心理描写により⁽²⁹⁾、幼稚で愚鈍なアラブ人イメージは増幅されていく。しかし、その描写は、すべてダリュ側からの一方的な視点に基づいたものであることに、注意しなければならない。作者は憲兵の情報が信用性に欠けるものであると同じく、ダリュの観察力や洞察力も信頼性に乏しいことを仄めかしている。ダリュがアラブ人の犯行内容を尋ねたときに、バルデュッシはこう曖昧に答える

「なぜ殺したんだ？」

「家の中のごたごただろう。片っぽが方っぽに小麦か何か借りていたらしい。そこははっきりしない。要するに、あいつは鎌で徒弟を切り殺したというわけだ。ほら、羊みたいに、グイとばかり……」⁽³⁰⁾

この憲兵の証言が伝聞に基づくものであることは、je crois や paraît-il の台詞が示している。要するに憲兵の証言は信用性に欠ける。

ダリュもまた三度にわたってアラブ人の行動に関する予測を外している。一度はアラブ人を教室においたまま寝室に行き、沙漠の景色を見ながら暫時物思いに耽り、その瞑想から覚めたとき、アラブ人は逃げたかもしれないと思いこむ。決心という責務から逃れられたと、一瞬喜びに浸る。しかし案に相違して、囚人は教室にいた。

また、夜半、男がベッドから起き上がり、静かに部屋から出て行ったときも、ダリュは、『「あいつ逃げるな。これで厄介はらいだ！」それだけしか考えなかった』⁽³¹⁾。だが今回も予想は外れ、期待は空しく碎かれる。

この土地に生まれ育ち、アラブ人の中で暮らし

ているダリュであっても、現住民の思考パターンや行動様式に対する理解に欠けていることを、この二度の失敗は表わしている。そして、終末部において、ダリュの予測はまたしても裏切られる。男は自由への道を放棄して、牢獄への道を選択したのだ。この事実はダリュに衝撃を与え、決定的に打ちのめされる。

このように、現地住民へ深い関心を寄せようとしないうバルデュッシと、理解しようとしてもその知識が不十分であるダリュの両者の姿を通して、作者はフランス人植民者とアラブ人との間にある深い断絶を描き出している。それゆえ、アラブ人の行動と心理に関して、読者はダリュの一方的な視点からの解釈に常に留意しなければならない⁽³²⁾。

第4章 名誉・客人歓待

アラブ人はどうして逃走しようとしなかったのか、なぜ自由への道を選ばずに、自ら進んで牢獄に至る道を選択したのか。この問いに対して、すべてが曖昧で解答不能とした⁽³³⁾、ダリュのヒューマニスティックな行為に感化されたとする説⁽³⁴⁾、あるいはアラブ人の無知に原因を求めたり⁽³⁵⁾、さらには彼の受動的生き方に基因すると論じるものもある⁽³⁶⁾。この無知で粗暴なアラブ人という見解は、アラブ人の改悛の情の欠如に関しても採用されている⁽³⁷⁾。しかし謎の解明に際して、われわれはアラブ人の誇り高さを忘れてはならない。

一体にアラブ人の行動規範の根底には、名誉を重んじ、面目を失うのを最大の恥辱と感ずる意識がある。さらに家族や一族の紐帯が強く、連帯意識（アサビーヤ）を持つ。そして名誉は寛容（カラム）や男らしさ（ムルーワ）という倫理観によって醸成される。アラブ人に顕著な旅人歓待や血の復讐（サアル）の慣行は、彼らのこのような行動規範、倫理から導き出されたものである⁽³⁸⁾。

ゆえに、アラブ人が両手を縛られ、動物のよう

な扱いを受けて初対面の男（ダリュ）の前に来たとき、終始俯いて顔を上げようとはしなかったのは、人間扱いされていない自己の姿を恥じた屈辱感からである。しかし、教室内でダリュの鋭い視線を感じた時、彼はダリュの目を真っ直ぐに見返して自己を主張し、ダリュは彼から、不安そうだが、依怙地（buté）で反抗的（rebelle）な印象を受けた⁽³⁹⁾。また男はダリュの一举手一投足を注意深く見守り、会話の内容に敏感に反応している⁽⁴⁰⁾。それゆえ、このアラブ人を愚鈍で無理解とするのは全く誤った判断である。彼は一人前の判断力を持ち、自由を奪われた自己の立場を深く自覚した誇り高いアラブ人である。

彼が犯行への罪悪感を表明しなかったのは、物を借りて返さないのは信義に悖り、おまけに追求された時に、責任を回避して逃げるのは男らしさに欠け、翻って、そのような行為を見逃すことは、黙認した本人にとっての恥辱となるからである⁽⁴¹⁾。ゆえに、男はダリュから、なぜ犯行に及んだのかと詰問されても、「あいつが逃げた。己はそれを追っかけた」としか答えられない⁽⁴²⁾。彼にとっては、つまり、アラブ文化の中で生きる者にとっては、正当な行為であるし、当然のことながら現場から罪人のように逃亡する必要も感じない。さらに追い撃ちを懸けるように、ダリュから後悔しているのかどうかと聞かれても、ただ口をあけて質問者を見つめ、その意味が理解できない表情を示しただけである⁽⁴³⁾。

この個所に関しても、多くの評者はアラブ人の理解能力不足や倫理観の欠如の表れとしか解釈しない⁽⁴⁴⁾。しかし、アラブ人からすれば、全ては彼らの行動規範に則った行為であり、卑怯な行為に対して、当然与えるべき懲罰を下しただけであり、責任を果たした充足感こそ感じようが、後悔の念は思考の埒外に属す。ここにも行動様式、思考パターンにおいて、アラブ人とフランス人ダリュの

岡 崎 桂 二

間に決定的なすれ違いがあることに留意する必要がある。しかし、ダリュやこれまでの多くの研究者にはこの点が理解されていない。

アラブ人の行動様式、思考パターンがどのようにテキストに表されているかを、豪華な食事が供されたときのシーンに見てみよう。

彼は明かりを灯し、アラビア人に飯を出した。「食べろ」と彼が言う。相手はギャレットの一片をとり、ががつと口にはこんだが、途中でやめた。

「それで、あんたは？」と彼が言った。

「お前が済んでから、おれも食べる」

厚い唇が半ばひらいた。アラビア人は逡巡した。やがて思いきってギャレットに食いついた。

なぜ男は途中でやめたのか、またなぜ逡巡したのか。答えはこれに続く会話で明かされる。

「お前が裁判官か？」

「違う。おれは明日までお前を預かるのだ」

「なぜおれといっしょに飯を食うんだ？」

「腹が減ってるからさ」

相手は黙った。ダリュは立って、出ていった。⁽⁴⁵⁾

無明時代と称されるジャーヒリーヤ期から、アラブ遊牧民には沙漠のエトスとして旅人を歓待する慣習があり、その気風は現代にまで連綿と受け継がれている。さらに預言者ムハンマドの規定により、その行為は宗教的行為規範に則ったものと見なされ、イスラム社会全体に広がった⁽⁴⁶⁾。沙漠の厳しい生息環境から生み出されたこの相互扶助、連帯という気風は、アラブ人の誇り高さと結び付き、さまざまなエピソードが残されている。わけ

でも諺になり語り告がれているエピソードや、旅人に供すべき食べ物を欠いて歓待の義務を履行できず、同時に面目をも失すると苦悩する父親に対し、我が身を火中に投げ込み、食事にせよと提案する息子に、その究極の姿を見い出すことができるであろう⁽⁴⁷⁾。このようなアラブ人の歓待の精神（カラム）は人格の高貴さ（カリーム）や名誉と密接につながっており、文化人類学者が多数の事例を報告している⁽⁴⁸⁾。

憲兵により動物扱いされてきたアラブ人は、フランス人教師から食事を出されたとき、相手の意図が理解できなかったが、一瞬の考慮の後、はからずもダリュが旅人を歓待する意志を持ち、自己と同じ文化に属する人間だと了解し、安んじて食事に没頭できたのである。

一方、ダリュにとっては、腹を空かせた人間を前にして、しかもたつぷりと食糧を備蓄しているものが、食事を供さないのは人道に悖るとした、ごく自然な行為かも知れない。だが、相手のアラブ人は、その行動に自己と同種の文化を察知し、連行中の犯罪人を客（l'hôte）として遇する意図を確認できたのである。フランス人憲兵なら決してこのような行動はとらないであろう。さらに「腹が減っているから」という発言は、同じ生身の人間同士という一体感をアラブ人に与え、彼はそこに支配者―被支配者の枠を超えたダリュの人間愛を感じ取った。

日常のありふれた行為に関して、ここにも両者の理解に齟齬が含まれていることに注意しなければならない。つまり、ダリュは自己の行為を人道的行為と思い、他方、アラブ人はそれをアラブ・イスラム文化の発露と見なしたのである⁽⁴⁹⁾。

仲間・友人（compagnon）の語源を思い出すまでもなく、人は食事を共にした相手とは何らかの親和的関係を築きあげるだろう。この二人きりの食事の光景は、『異邦人』のムルソーとレエモ

カミュ「客」におけるアラブ人の表象

ンの食事風景を想起させる。単なる顔馴染みでしかなかったレエモンからの招待を、自炊の手間が省けると考えて受諾したところから、ムルソーの悲劇は始まる。食後、男は突然チュトワイエで呼びかけ、ムルソーを驚かせる⁽⁵⁰⁾。面と向かって二人きりで食事をすると、両者の間にいつしか一種の友情関係が築き上げられるものだ。同様に、ダリュはアラブ人を「tu」で呼びかけ、それに応じて男も「tu」で返している。

この食事をめぐるシーンにおいて、タイトルは絶妙の効果を発する。フランス語の「hôte」は客のみならず、主客双方を指し示す。ダリュは主人(hôte)の務めを果たし、アラブ人を客(hôte)として遇しているのだ⁽⁵¹⁾。この関係を理解したアラブ人は主人にさらなる歓待を求める。

「われわれといっしょに来てくれ」と彼は言った。

Viens avec nous, dit-il.⁽⁵²⁾

この2人称単数形による親しげな呼びかけ。また nous の1語は、同じ土地、アルジェリア、に共に生きる者としての連帯感を掻き立てる。この表現において、植民者一被支配者の垣根を越えて、アラブ人は自己とダリュを完全に同質の人間と見なしている。

終末部でのアラブ人の選択は、この食事と睡眠という歓待から導かれたものである。つまり、主人は歓待の限りを尽くして寛大さを示し、客も受けた歓待を消費し、さらに広言して主人の名誉を高めるという礼儀作法が決められている。これはアラブ・イスラム圏での社会的義務であり行動規範である。このようにして主客双方に互酬関係が築きあげられるのである⁽⁵³⁾。歓待と名誉の文化に身を置くアラブ人にとって、与えられた選択肢の決定要素は、いずれが主人の名誉を高めることが

できるかに尽きる。それは当然のごとく、受けた恩義を返すべく、自身が犠牲になり、自らを裁きの道にかけける方向である。翻って、潔く自首することは、また本人自身の名誉をも高めることに通じる。しかし、その決断はフランス人官憲に自己の運命を委ね、自身のアイデンティティーを喪失することに繋がる。

アラブ人の歓待の精神は、「客」というテキスト理解のキー・ワードである。ダリュから二つの選択肢を示されたとき、アラブ人は一種狼狽の色(une sorte de panique)を現し、一言「聞いてくれ」とダリュに言ったのだ⁽⁵⁴⁾。なぜ、彼はパニックに陥ったのか。男は何を言いたかったのか。研究者はこの個所を問題にしようとはしない。おそらく、彼らにとって理解不能な記述であるからであろう。しかし、アラブ人の論理や思考様式を考察してきたわれわれには、この男の反応や主張を理解できるであろう。前夜、男とダリュはこんな会話を交わしている。

「憲兵は明日くるのか？」

「わからない」

「あんたはわれわれといっしょに来るのか？」

「わからない。だが、どうしてだ？」⁽⁵⁵⁾

ダリュは男がなぜこんな質問をするのか理解できず、再度「どうしてだ？」と尋ねるが、男はその質問に答えず、逆に、「われわれといっしょにきてくれ」と懇願する。今度はダリュが沈黙する⁽⁵⁶⁾。ダリュは明らかに男に嘘をついている。憲兵が明日再び姿を現すことはない。また、自己の信念からして、憲兵から護送を依頼されたとき、すでに男を自由な身に解放しようとする決心はついていたはずだ。しかし、この曖昧な回答と依頼に対する無回答に、アラブ人はかすかな希望を抱いたに違いない。このフランス人教師が憲兵との

岡 崎 桂 二

間に入り、自己を守ってくれるかもしれない。自分を客として遇し、主人役を最後まで務めてくれると⁽⁵⁷⁾。そのかすかな希望を、峠の頂上で二つの選択肢を迫られる瞬間まで持ち続けていただろう。しかし、突然、信頼関係が絶たれる、という予想外の事態になり、男はパニックになったのである。「わからない」というのは、ダリュの本心だったかもしれない。相手に一時的な安堵感を与えるためのヒューマニストの善意の嘘だったかもしれない。しかしその嘘は異文化に属する男に誤解を与えてしまったのだ。

男はダリュも同種の人間だと思い込んだのである。このことは、翌朝、男が目を覚まし、ダリュを見たときに、「怖ろしい勢いではね起き、狂おしい目でダリュを見つめたが、それと見分けがつかなかった。その表情は怯えきっていて、教師も一歩後に退ったほどだった」という激しい反応で裏づけられるであろう⁽⁵⁸⁾。アルジェリアという植民地であって、男は日頃フランス人とは無縁の生活をおくっていたか、あるいは厳しい主従関係の下に置かれていたかのいずれかであっただろう。目を覚ますとそのフランス人がいる。パニックに陥るのは、植民地下の被支配者が支配者に示す当然の反応であろう。しかし男はそのフランス人がダリュであると認識したとき、すぐに冷静さを取り戻す。自分と共に食事をし、同じ部屋で一夜を過ごした仲間がそこにいると分かったからである。さらにダリュ自身も男に一種の友情を感じていたのである。

この男の存在が、現在の状況の下では彼が拒否しているが、彼のよく承知している一種の友情を彼に押しつけてくるからでもあった。人間というものは、同じ部屋に寝ると、それが兵士であれ囚人であれ、不思議な絆を結ぶものだーあたかも、甲冑と着物とを脱ぎ捨て

てしまえば、その差を超えて、古い昔から共通する夢と疲労のなかに、毎夜毎夜一つに結ばれていたとでも言うように。⁽⁵⁹⁾

同床異夢ではあり、誤解に基づくとはいえ、その相互の信頼感は山道を登り、食糧と金を受け取った時まで持続していた。しかし突然の別れを告げられ、男は一瞬パニックに陥ったが、やがて考えをめぐらして、自己の行動規範に従って自首の道を取ったのである。

ダリュと共に山道を辿るアラブ人は、『異邦人』において、悲劇の現場である海辺に着くまでの、ムルソーと同じ心理状態にある。二人はともに親しい人間に囲まれ、安心感、充足感にひたっていた。『異邦人』でムルソーが見た風景はこのように描かれている。

小さな丘を一つ越えなければならなかった。丘は黄色い小石と真っ白なしゃぐまゆりとおおわれて、既にきつい青をたたえた空の高みに浮き出ている。……丘のへりに出るまでに、既に不動の海の姿が目前にあらわれ、遠くには、澄んだ水のなかに、どっしりとして睡むような岬が一つ、見えた。モーターの軽快なひびきが、しずかな大気を縫って、われわれのところまで上って来る。はるかかなたに、小さなトロール船が、きらきら光る海のさなかを、かすかに進むともなく進んで行くのが、見えた。マリイはいちはつを何本も摘んだ。⁽⁶⁰⁾

友人や恋人と共にヴァカンスに出かける喜びと、どっしりと人間を包み込み、自然と人間の一体感の喜びが充満している。黄、白、青の鮮やかな色彩に溢れ、その中で丘、海、岬は永遠性を保証するかのごとく堅固な様相を呈し、清澄で静か、か

つ、きらきら、という形容詞群は純粹さや希望、生の躍動、につながっている⁽⁶¹⁾。

同様に、翌朝、アラブ人を連れて学校を出た時の「客」の描写はこうだ。

雪の溶け方はますます早くなった。太陽はただちに水溜まりの水を汲み上げ、全速力で高地を清掃していた。高地はだんだんと乾燥してきて、大気そのもののようふるえていた。二人がふたたび歩き出したとき、足に踏まれた土が鳴った。間をおいて、鳥が、二人の目の前の空間を、愉しげな鳴き声で切り割いた。ダリュは深く息をして、爽やかな光を飲んでた。……その親しい大きなひろがりをして、彼の中には一種の興奮が生まれていた。⁽⁶²⁾

雪、清掃、乾燥、と清浄感を増幅させる描写が続く。さらに、愉しげな、爽やかな、親しい、という感覚表現がダリュの心象風景を現している。ダリュの目から見ても、自然はこのように希望に溢れている⁽⁶³⁾。まして、アラブ人にとってはなおさらだ。しかし眺めている景色は同じであっても、二人の思いは異なる。あと1、2時間歩けばこの男とは無関係になれると解放感に溢れるダリュに対して、アラブ人は前夜の答えを聞かぬまに、ダリュが同行しているのをその無言の答えと取り、同胞意識を感じていただろう。その信頼感が突然断ち切られた。人は当然のことながら、パニックに陥るであろう。

第5章 連帯意識と部族の論理

このアラブ人は決して理性に欠け、倫理感を持たない愚鈍ではない。かれは自己の置かれた状況を十分に理解している。ただ問題は、彼は自己の属する社会の論理や行動規範に従っており、それ

らがダリュの属すフランス人の論理と行動規範とは齟齬を来している点である。

男が遊牧民への道を取らなかった背景には、旅人歓待から導き出された結論以外に、もう一つ別な理由も関係している。男は村に住む定住アラブであり、定住民と遊牧民とは言語、風俗、習慣、等々多くの面で異なっており、相互に異質の世界を形成している⁽⁶⁴⁾。それゆえ、男にとって遊牧民に混じって生活することは、今までの行動様式を変え、生活習慣を捨てて、全く新しい生活をおくることを意味する。また遊牧民は農耕や商業を軽蔑し、それらに従事するのを潔しとせず、定住民からの略奪という形で生活用品を調達してきた歴史を有す。それゆえ、定住アラブと遊牧アラブは非友好的関係にある場合が多い⁽⁶⁵⁾。そしてこの物語の舞台となっているアルジェリアでは、カピリア山地の遊牧民は現在に至るまで、強固な部族集団を形成している⁽⁶⁶⁾。また、おそらくそこも飢餓に苦しんでいて、他人を受け入れる余地はないであろう。そのような社会に逃げ込むことは自己のアイデンティティーを喪失することである。ダリュが言うようにそこにはその掟 (loi) が支配しているのだ。このことをもまた多くの研究者は見落としている。アラブは一帯でも一枚岩でもないのである。かくして、男にとって、遊牧民に通ずる道も閉ざされている。

また男は部族の論理、親族の結束をも考慮したに違いない。伝統的にアラブは親族や部族の結束が強く、固い連帯意識を持つ。個人同様、一族の名誉保持を重視し、不名誉をそそぐには、結束して仲間の敵を討たなければならない。この名誉保持の観点から、部族内の争いや紛争を部族内で処理しようとし、それを外部に漏らしたり、外部勢力に委ねることを好まない⁽⁶⁷⁾。護送してきた憲兵は、「こいつをあそこに置いとくわけにはいかん。こいつの村はざわざわしている。奴らはこいつを

奪い返そうとしていたのだ」とダリュに説明した⁽⁶⁸⁾。さらに、「ひと月も前からあいつを探していたのに、仲間の奴らがかくまっていたのだ。あいつは従弟を殺したのさ」と詳細を話す⁽⁶⁹⁾。

この憲兵の説明から分かることは、身内の犯罪の処理を部外者、具体的にはフランス官憲、に委ねるのではなく、彼らの掟に則って独自に処理しようとするアラブ住民たちの動きである。たとえ犯罪者であっても、身内の者を部外者に引き渡すことは、自分たちの統治能力の欠如を示し、体面を失し、その社会全体の恥となる。さらにアラブ社会では、犯罪や紛争の処理は加害者、被害者、双方の縁者を交えての調停で決着がつけられる場合が多い⁽⁷⁰⁾。それゆえ、このアラブ人の属する部族は、男をフランス人に引き渡すのを拒み、その処理をめぐって一ヶ月もの間ざわざわと騒がしかったのであろう。

突然、ダリュから二つの選択肢を与えられた時、狼狽し、数分間、両手をだらりと垂らしてその場に立ちつくした。その間に、男は様々なことに考えめぐらしたであろう。憲兵のこと、ダリュから客扱いされたこと、そして一族や村のことを。もし、自分ひとりが自由になる道を選んだならば、恐らくその報復は村に向けられるであろう。村は再び搜索され、多くの人間に迷惑が及ぶ。まして、今やアラブ人蜂起の噂が憲兵にも達している。さらに、自分が犠牲になり、牢獄への道を歩むのは客扱いしてくれたダリュへの恩返しにもなり、自己や一族の名誉の保持にもなる。あるいは、飢餓ゆえに殺人を犯した人物にとって、たとえ留置署であっても、そこで寝食は保証されている。このような意見の研究者もいる⁽⁷¹⁾。

かくして、様々な要件を考慮すれば、留置署に足を向けるのは当然ではないか。誇り高いが、しかし飢餓に苦しむアラブ人であるならば。かれは愚鈍でも、受動的でもない。恐らく、ダリュから

選択肢を示された時、男がダリュに訴えたかったことは、自己の置かれたこのような絶体絶命にある状況説明ではなかったのか。しかし、「聞いてくれ Écoute」の必死の一言は聞き入れられず、空しく置き去りにされてしまう。部族から切り離され、庇護者と見なしていた人間からも見放され、警察に出頭する男もまた絶対の孤独の中に置かれている。このアラブ人もまた自己の「王国」からの「追放者」となったのだ。

最後に残るのがダリュが黒板の上に見つけた文字の書き手の問題である。この解釈になると、野蛮で無知、植民者の抑圧により受身で消極的な性向が身に付いた人物、と解釈されてきたアラブ人が、突然、植民地反対運動の闘士に変身させられる。「お前はおれ達の兄弟を引き渡した。必ず報いがあるぞ」という稚拙な (par une main malhabile) 文字群⁽⁷²⁾。ショーワルターを始め多くの研究家が、この警告文の筆者をアラブ人の仲間に擬している⁽⁷³⁾。

たしかに当初から、男の後を仲間が密かに追尾していると思われる表現がなされている。それらを時系列に並べてみると、以下ようになる。冒頭、憲兵に連行されて教室に入ると、あたかも仲間の存在を確認するごとく、「男は窓のほうを眺めていた」⁽⁷⁴⁾。また夜半、男は静かに起き上がり、「そのすべての注意力を集めて耳をすませているかのように」⁽⁷⁵⁾ 寝床の上に座って待った。そして「異常にしづかな足どりで」⁽⁷⁶⁾ 戸外に出て、再び戻ってきた。その後、しばらくしてダリュは、「校舎のまわりを忍び足でゆく足音が聞こえるように思えた」⁽⁷⁷⁾。そして翌朝、校舎を出たとたんに、ダリュは「背後にかすかな物音が聞こえるように思った」⁽⁷⁸⁾。

このような表現から、男には仲間が付いてきており、二人の動静を監視しているように思えるが、その可能性は低い。

カミュ「客」におけるアラブ人の表象

男はただ単に「窓のほうを眺めていた」という記述しか無く、それ以上の情報は与えられていない。そしてダリュの目には、男が依怙地で反抗的なように映ったが、この者が叛乱に加わり、我々に反抗しているようには思えない、と憲兵が証言している⁽⁷⁹⁾。また夜半、男が目を覚まして、細心の注意を払い、異常に静かな足どりで部屋を出ていったのは、同室のダリュを起こさないための配慮であり、戸外の小屋に行ったのは小用をたすためである⁽⁸⁰⁾。事実、男は小屋から戻って部屋に入る時も、「注意深く扉を閉め、音一つたてずに寢床に戻った」⁽⁸¹⁾のである。男は礼儀を弁え、同室の人間に当然の配慮をしているだけなのだ。このようにテキストを厳密に読めば、男が密かに仲間と連絡を取ったとする説は成立しない⁽⁸²⁾。

また夜半、ダリュが聞いた足音も、夢の中の出来事のような記述がなされており⁽⁸³⁾、真偽は不明で、仲間の存在は断定できない。さらに、翌朝、ダリュが物音に気づいて、校舎の周囲を調べたが、人の存在は確認できず、男もまた、ダリュの様子を眺めていたが、「分かっているようには見えなかった」⁽⁸⁴⁾のだ。この時、仲間が隠れていたのなら、男はその発覚を恐れて何らかの行動を起こし、表情を変えたに違いない。しかし、男が動揺した気配は一切無い。

結論として、男の仲間が跡を付け、ダリュの行動を始終監視していたとする解釈には多くの難点がある。そして、もし男に仲間がいるならば、彼あるいは彼らの要求は何か、また、なぜ文字で脅迫するという間接的な手段を取るよりも、男と共に謀してダリュを襲わなかったのか、という根本的な疑問がある。

このようにアラブ人を革命運動の闘士の一人と見なすには数々の難点がある。「稚拙な字で書かれていた」という表現に引かれて、研究者は一致してその書き手をアラブ人の仲間と考えているが、

その筆者がアラブ人の仲間以外の可能性も排除できない。第一に、この文字は何語で書かれていたのか。フランス語か、あるいはアラビア語でか。もし仲間がベルベル人ならば、彼らは文字を持たない。また、このアラブ人はフランス語は一語も解さない、と冒頭で説明されており、恐らく仲間たちもこの言語には不案内であろう。それではアラビア語でか。フランスの地図の横に並ぶアラブ文字。それは植民地の現状を明らかにし、真に鮮明な対比をもたらす。いずれであるのかを、作者は明らかにしない。

一つの解釈としてルーケが主張するように、筆者をフランス人、つまり、ダリュの自筆と考えることも可能であろう⁽⁸⁵⁾。稚拙なのは彼の感情の乱れであり、後悔や自身に対する怒りゆえの文字の乱れである。判断を相手に委ね、自己責任を回避したことからもたらされる深い自己嫌悪。このような様々な感情が交錯するままの殴り書き。この一見、奇矯とも思えるルーケの説に、より真実性が含まれているように思える。またこの見解は、潔く法の裁きを受けに行くアラブ人の倫理的な行動と、ダリュの責任回避の非倫理的行動の対比をより鮮明に浮かび上がらすことになり、説得力を持つ説と評価できる。

『追放と王国』の6篇に共通するテーマがあるのかと議論されているが、連帯と孤独、コミュニケーション不在の悲劇が全ての物語に通底すると指摘されている⁽⁸⁶⁾。「客」に読み取れるのも、相手の必死の同行を求める声に応えず、孤独の道を歩んだ男の悲劇である。アラブ人が孤独をかみ締めながら牢獄への道を一人たどったのと同様に、フランス人教師もまた、人間全体から引き下がる絶対の孤独に引き込んだ魂の叫びと解せないだろうか⁽⁸⁷⁾。

第6章 嘘言

「客」において、アラブ人は名前こそ与えられていないが、表情と性格を持つという、他のカミュ作品におけるアラブ人とは異質な扱いを受けている。さらに、「不貞」同様、アラビア語を話すフランス人が初めて登場し、アラブ人とフランス人はアラビア語で会話を交わす一当然のことながら、表記上は全てフランス語に代えられてはいるが。非常に不幸で悲劇的な出会いではあったが、両者は一個の人間同士として接触をしたのである。

だが、双方の文化理解において互いに決定的な誤解があった。カミュは『追放と王国』において、各編のタイトルを変え、その順序を変え、推敲を重ねている⁽⁸⁸⁾。執筆の初期段階では、アラブ人は徒弟とその13才になる息子をも同時に殺害したと記されている。そのことを咎められてアラブ人は、「同じ家族だ。あいつもまた逃げたんだ。俺は怖かった。全ては神の思召しだ」と小児殺害の意図を話す⁽⁸⁹⁾。

この弁明に関しても、アラブ人とフランス人(ダリュ)で理解に齟齬を来している。13才の人間は、一般的には子どもの領域にいると見なされるであろう。まして教職についているダリュにすれば、教え子を思い浮かべ、犯行の残忍さに一層の怒りを催させる。

しかし、アラブ文化においては、男子は5、6才より父親にならって礼拝を始め、10才前後で断食を実行し、一人前のイスラム教徒と見なされるようになる⁽⁹⁰⁾。なかには父親と同行してメッカ巡礼を果たす者もいる。また貧しい地域であれば、若年から労働力の一員とみなされ、家計を助ける者もいる。ダリュの生徒一家が、彼から日々配給される小麦で辛うじて飢えを逃れている事実もある。さらに先述のようにアラブ人は強い連帯意識を有する。アラブ人の目から見て大人と見なされる人物が、当該人物と同じ行動を取れば、その

者をも処罰しなければならない。

しかし、カミュは、このアラブの行動規範は異文化に属する者には理解されないと判断し、さらに、2人を殺害した犯人とすれば、アラブ人により凶悪なイメージを与えると考えて、この部分を削除した⁽⁹¹⁾。

こうして書き直された結果、アラブ人の残忍さは薄められて、無知な貧困の犠牲者という人物像になり、他方、教師はより博愛精神に溢れる存在となった⁽⁹²⁾。その結果、「客」はヒューマニスティックな行為のもたらす悲劇、あるいはコミュニケーション不在をテーマとするドラマ、と解釈されてきた。

しかし、これはダリュに焦点を置き過ぎた理解である。カミュは執筆当初、この作品に「高地と有罪者 Les Hauts Plateaux et le condamné」、あるいは「カイン」という題を冠していた⁽⁹³⁾。しかし、その用語が含む具体性、意味限定性を考慮して、「客 L'Hôte」という中立的で非限定的な題に変更した。既述の様に、hôteは主客双方を指す両義性を有す。このことから、小説「客」の解釈において、主人のみならず、客にも焦点を当てなければならない。アラブ人の名誉回復を図らなければならない。こうすることで、この物語は異文化接触における相互理解の欠如、という普遍的なテーマを含むことが明らかになった。ダリュ同様、アラブ人もまた異文化接触の犠牲者だったのだ。この作品をより深く理解するためには、本稿で扱ったように、アラブ人の声にも耳を傾けなければならない。

両者の悲劇はなぜ起きたのか。契機は、「憲兵は明日くるのか」、「あんたは我々といっしょに来るのか」という男の問いに、ダリュが「分からない」と明らかに嘘をついて、男に希望を持たせた時にある⁽⁹⁴⁾。

カミュは嘘言を異常に忌避する。『異邦人』に

カミュ「客」におけるアラブ人の表象

において、ムルソーが独房中で読み耽った古新聞の記事。嘘がもたらす親子の悲劇というテーマは、後に『誤解』に結実する。この出奔した後、立身出世をした息子が帰郷し、身許を偽って母親が経営するホテルに宿泊し、金に目が眩んだ肉親によって殺害されるという悲劇は、中東世界でも広く知られたエピソードであるが、アラブ世界では親の元を離れて出稼ぎに行った者の、アイデンティティ喪失の悲劇として理解されている⁽⁹⁵⁾。カミュがこのエピソードを何によって知ったかを研究者は明らかにしていないが、この虚偽がもたらす親子の悲劇、沈黙の悲劇はカミュ作品に通底する重要なテーマである。カミュにとって、「嘘言は暴力や殺人と同じほどに忌まわしいものである」⁽⁹⁶⁾。

この観点からすると、「客」は虚言により自己否定に至ったダリュの悲劇であるとともに、強制的に故郷（＝王国）を追放されたアラブ人の悲劇でもある。このようにして、題材、テーマ、表現、人物設定、等の多方面にわたって、「客」は底流にアラブ文化との密接な関連を持ち、その作品理解にはアラブ文化の知見が必須であることが明らかになったであろう。

そして、歓待の精神、誇り高さ、名誉心と廉恥、一族の連帯精神、定住アラブと遊牧アラブの差違、というアラブ人の行動規範や思考パターンに照らして作中のアラブ人の行動を分析することにより、従来見落とされてきた様々な謎を解明できた。その結果、「客 L'Hôte」はタイトルが表す両義性そのままに、主人 (l'hôte) と客 (l'hôte) 双方が異文化接触上の誤解により、共に絶対の孤独に陥る物語であることを明らかにすることができた。

〔参考文献〕

Ageron, Ch.-Robert, *Histoire de L'Algérie contemporaine* (1830～1966), Paris, Presses Univer-

sitaires de France, 1966. (私市・中島・訳『アルジェリア近現代史』、白水社、2002年)。

Bakalla, M.H., *Arabic Culture through its Language and Literature*, London, Kegan Paul International, 1984.

Baroli, Marc, *La vie quotidienne des Français en Algérie, 1830-1914*, Paris, Hachette, 1967.

Berque, Jacques, *Les Arabes d'hier à demain*, Paris, Seuil, 1960.

Blanchot, Maurice, "Le détour vers la simplicité," in *Les critiques de notre temps et Camus*.

Brée, Germaine (ed.), *Camus ; A Collection of Critical Essays*, Englewood Cliffs, Prentice-Hall, 1962.

al-Bukhārī, *Ṣaḥīḥ Bukhārī*. (牧野信也・訳『ハディースイスラーム伝承集成』、中央公論新社、2001年)。

Campbell, Robert B., "The Devil and Deviltry in Some Arabic Fiction at the Turn of the Century," in *Festschrift Ewald Wagner zum 65. Geburtstag*, band 2, *Studien zur arabischen Dichtung*, eds., W.Heinrichs and G.Schoeler, Beirut, Franz Steiner, 1994.

Camus, Albert, *La Peste*, Paris, Gallimard, 1947.

_____. *L'Exil et le royaume*, Paris, Gallimard, 1957.

_____. *L'Étranger*, Paris, Gallimard, 1957.

Cervo, Nathan, "Camus's 'L'Hôte'," *Explicator*, 48 (1990).

Champigny, Robert, *Sur un héros païen*, Paris, Gallimard, 1959. (平田重和・訳『カミュ「異邦人」のムルソー—異教の英雄論—』、関西大学出版部、1997年)。

Charles, Raymond, *Le Droit musulman*, Paris, Presses Universitaires de France, 1960.

Chaulet-Achour, Christiane, *Albert Camus, Alger; L'Étranger et autres récits*, Paris, Séguier,

- 1998.
- Cryle, Peter, *Bilan critique : L'Exil et le royaume d'Albert Camus-essai d'analyse*, Paris, Minard, 1973.
- Curzon-Hobson, Aidan, "Between Exile and the Kingdom : Albert Camus and Empowering Classroom Relationships," *Educational Philosophy and Theory*, 35 (2003).
- Eickelman, Dale F., *The Middle East : An Anthropological Approach*, Englewood Cliffs, Prentice-Hall, 1981. (大塚和夫・訳『中東—人類学的考察』、岩波書店、1988年)。
- Fitch, Brian T., "Le paradigme herméneutique chez Camus," in *Albert Camus 1980* (Second International Conference, February 21-23, 1980).
- Fortier, Paul A., "Le Décor symbolique de 'L'Hôte' d'Albert Camus," *The French Review*, 46 (1973).
- Gay-Crosier, Raymond (ed.), *Albert Camus 1980* (Second International Conference, February 21-23, 1980), Gainesville, University Presses of Florida, 1980.
- Gellner, Ernest, *Muslim Society*, Cambridge, Cambridge UP., 1981. (宮治美江子・堀内正樹・田中哲也・訳『イスラム社会』、紀伊国屋書店、1991年)。
- Griem, Eberhard, "Albert Camus's 'The Guest': A New Look at the Prisoner," *Studies in Short Fiction*, 30 (1993).
- Grimaud, Michel, "Humanism and the 'White Man's Burden': Camus, Daru, Meursault and the Arabs," in *Camus's L'Étranger : Fifty Years on*.
- Grobe, Edwin P., "The Psychological Structure of Camus's 'L'Hôte'," *French Review*, 15 (1966).
- Guers-Villate, Yvonne, "Rieux et Daru ou le refus délibéré d'influencer autrui," *Papers on Language and Literature*, 3 (1967).
- Harlow, Barbara, "The Maghrib and the stranger," *Alif (Journal of Comparative Poetics)*, 3(1983).
- Hurley, D.F., "Looking for the Arab : Reading the readings of Camus's 'The Guest'," *Studies in Short Fiction*, 30 (1993).
- Ibn Khaldūn, *al-Muqaddima*. (森本公誠・訳『歴史序説』、岩波書店、2001年)。
- Kiernan, Thomas, *The Arabs : Their History, Aims and Challenge to the Industrialized World*, London, Abacus, 1978.
- King, Adele (ed.), *Camus's L'Étranger : Fifty Years on*, Hampshire, Macmillan, 1992.
- Lévi-Valensi, Jacqueline (ed.), *Les critiques de notre temps et Camus*, Paris, Garnier, 1970.
- Lewis, Bernard, *The Assassins : A Radical Sect in Islam*, London, G.Weidenfeld & Nicolson, 1967. (加藤和秀・訳『暗殺教団—イスラームの過激派』、新泉社、1973年)。
- Lutfiyya, Abdulla M & Churchill, Charles W., *Readings in Arab Middle Eastern Societies and Cultures*, The Hague, Mouton, 1970.
- Mailhot, Laurent, *Albert Camus ou l'imagination du désert*, Les Presses de L'Université de Montréal, 1973.
- Mansfield, Peter, *The Arabs*, Harmondsworth, Penguin Books, 1981.
- McDermott, John V., "Camus' Daru : Just How Humane?" *Notes on Contemporary Literature*, 15 (1985).
- Miller, Owen J., "L'Exil et le Royaume: Cohérence du Recueil," *Albert Camus*, 6 (1973).
- Muhlestein, Daniel K., "A Teacher and His Student : Subversion and Containment in Camus's 'The Guest'," *Studies in Short Fiction*, 36 (1999).
- Perrine, Laurence, "Camus' 'The Guest': A Subtle and Difficult Story," *Studies in Short Fiction*,

カミュ「客」におけるアラブ人の表象

- 1 (1963).
- Peyrouton, Marcel, *Histoire générale du Maghreb : Maroc, Algérie, Tunisie ; Des origines à nos jours*, Paris, Albin Michel, 1966.
- Picon, Gaëtan, “Exile and the Kingdom,” in *Camus ; A Collection of Critical Essays*.
- Pingaud, Bernard, *L'Étranger de Camus*, Paris, Hachettes, 1971. (花輪光・訳『カミュの「異邦人」』、審美社、1975年)。
- Quilliot, Roger (ed.), *Théâtre, récits et nouvelles*, (Coll. Bibliothèque de la Pléiade), Paris, Gallimard, 1962.
- _____, (ed.), *Essais*, (Coll. Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1965.
- _____, “Un monde ambigu,” in *Les critiques de notre temps et Camus*.
- Rabinow, Paul, *Reflections on Fieldwork in Morocco*, Berkeley, The University of California Press, 1977. (井上順孝・訳『異文化の理解—モロッコのフィールドワークから』、岩波書店、1980年)。
- Rigaud, Jan, “The Depiction of Arabs in *L'Étranger*,” in *Camus's L'Étranger : Fifty Years on*.
- Roelens, Maurice, “Un texte, son 《histoire》 et l'histoire 《L'Hôte》 d'Albert Camus,” *Revue des Sciences Humaines*, 42 (1977).
- Rooke, Constance, “Camus' ‘The Guest’ : The Message on the Blackboard,” *Studies in Short Fiction*, 14 (1977).
- (el)-Saadawi, Nawal, *The Hidden Face of Eve : Women in the Arab World*, 1980. (村上真弓・訳『イヴの隠れた顔—アラブ世界の女たち』、未来社、1988年)。
- Said, Edward W., *Culture and Imperialism*, New York, Vintage Books, 1998. (大橋・訳『文化と帝国主義』、みすず書房、1998年)。
- Schalk, David L., “Was Algeria Camus's Fall?” *Journal of Contemporary European Studies*, 12 (2004).
- Showalter, English, Jr., *Exiles and Strangers ; A Reading of Camus's Exile and the Kingdom*, Columbus, Ohio State UP., 1984.
- _____. *The Stranger ; Humanity and the Absurd*, Boston, Twayne Publishers, 1989.
- Simon, John K., “Camus' Kingdom : The Native Host and an Unwanted Guest,” *Studies in Short Fiction*, 1 (1964).
- Sterling, Elwyn F., “A Story of Cain : Another Look at ‘L'Hôte’,” *The French Review*, 54 (1981).
- Stetkevych, Jaroslav, “Sacrifice and Redemption in early Islamic Poetry : Al-Ĥuṭay'ah's ‘Wretched Hunter’,” *Journal of Arabic Literature*, 31 (2001).
- Stetkevych, Susannne P., *The Poetics of Islamic Legitimacy : Myth, Gender, and Ceremony in the Classical Arabic Ode*, Bloomington, Indiana UP., 1990.
- Tarrow, Susan, *Exile from the Kingdom : A Political Rereading of Albert Camus*, Alabama, The University of Alabama Press, 1985.
- Todds, Olivier *Camus : une vie*, Paris, Gallimard, 1998. (有田・稲田・訳『アルベール・カミュ—ある一生』、毎日新聞社、2001年)。
- Walker, David H., “De *L'Exil et le Royaume au Premier Homme*,” *Equinoxe*, 13 (1995).
- Zants, Emily, “Camus' Deserts and their Allies : Kingdoms of the Stranger,” *Symposium*, 17 (1963).
- 大塚・小杉・小松・東長・羽田・山内・編『岩波イスラーム辞典』、岩波書店、2002年。
- 大塚和夫・編『現代アラブ・ムスリム世界—地中海と

岡 崎 桂 二

サハラのはざまで』、世界思想社、2002年。

塩尻和子・池田美佐子『イスラームの生活を知る事典』、東京堂出版、2004年。

鈴木忠士『カミュ「異邦人」の世界』、法律文化社、1986年。

奴田原睦明『遊牧の文学—イブラヒム・アル・コーニーの世界』、岩波書店、1999年。

堀内 勝『砂漠の文化—アラブ遊牧民の世界』、教育社、1979年。

同 『ラクダの文化史—アラブ家畜文化考』、リポート、1986年。

三野博司『カミュ「異邦人」を読む—その謎と魅力』、彩流社、2002年。

同 『カミュ—沈黙の誘惑』、彩流社、2003年。

宮治一雄『アフリカ現代史Ⅴ北アフリカ』(世界現代史17)、山川出版社、1978年。

宮治美江子『タフスト・イマジゲン(ベルベルの春)?—アルジェリアのベルベル人問題』、『文化人類学』、1巻2号、1985年。

同 「ムスリムの自然観—カビール人の事例から」、板垣雄三・編『イスラム・価値と象徴』(講座イスラム4)、筑摩書房、1986年。

同 「アルジェリア—カビリー地方における政治・社会組織と慣習法」、大森元吉・編『法と政治の人類学』、朝倉書店、1987年。

柳橋博之『イスラーム財産法の成立と変容』、創文社1998年。

同 『イスラーム家族法—婚姻・親子・家族』、創文社、2001年。

(文献略号)

EI Encyclopaedia of Islam, new edition

EQ Encyclopedia of Qur'an

ER L'Exil et le royaume

辞典 岩波イスラーム辞典

(1) カミュ作品は小説、戯曲、のフィクション、エッセイ、哲学・思想書、それに時事的な記事、論文、手記、書簡、等多岐にわたるが、小説に限定すれば、極めて寡作と評されよう。本稿ではガリマール社のコレクション・フォリオ版を用い、テキスト・クリティーク上の異同に関してはQuilliot校訂のプレイヤッド叢書版に基づく。翻訳は新潮文庫版(窪田啓作訳)を使用した。題名、訳文を含め、一部を変更したことをお断わりする。引用文においては、最初に原文、次いで日本語訳書、の該当頁を記した。

(2) 『異邦人』においてムルソーがアラブ人世界に無関心であることは、バルコニーから通行人を眺める場面において、当然視野に入るべきアラブ人が完全に視界から消えている点に典型的に現れている。*L'Étranger*; pp.37-41. 三野(2002)、47頁～48頁。

(3) 『ベスト』はアルジェリアの要港都市オランを小説舞台としているが、そのイスパニア性は描かれているが、主要な住民たるアラブ人は完全に無視されている。*Chaulet-Achour*, p.136. この事実から、パリの大新聞社から派遣されてきたランベールが自己の訪問目的に関し、医師、タリューと交わす会話内容とあいまって、カミュの人種差別の表れと非難する発言もある。参照、サイード、320頁～321頁、326頁。『ベスト』は全体主義の蔓延、ナチスの脅威を寓意化した作品と理解されているが、そのような非難者たちは、アルジェリアの人種問題をファシズムの問題へのすり替えとしてカミュを批判する。*Chaulet-Achour*, pp.137-142.

(4) 『転落』と『追放と王国』の出版事情については、トッド、下巻、297頁～298頁。『転落』とテーマ的に密接なつながりを持つ短編集『追放と王国 L'Exil et le royaume』には、6編の小説が収録されており、各編は以下のような題を持つ。「不貞 La

カミュ「客」におけるアラブ人の表象

femme adultère]、「背教者 Le renégat]、「口利かぬ者 Les muets]、「客 L'hôte]、「ヨナ Jonas]、「生い出ずる石 La pierre qui pousse]。各編はパリ、ブラジル、アルジェリアとそれぞれ作品舞台を異にし、妻、労働者、教師、画家、宣教師、技師、と主人公像も異なるが、孤独と連帯、コミュニケーション不在、という共通テーマによって緊密に結び付けられている。そして、「不貞」、「背教者」、「口利かぬ者」、「客」がアルジェリアを舞台としている。

- (5) 『異邦人』理解に関しては、『異邦人』産業」と揶揄される程の盛況を示しているが、本稿の『異邦人』理解は、その先鞭をつけたシャンピニィと独自の解釈で知られるパンゴー、さらに諸研究者の意見を紹介、整理しているショーウォルターに基ずく。Showalter (1989)。また、三野 (2002)、同 (2003) が最新の研究を整理し、まとめている。
- (6) 「客」の解釈に関しては、Cryle (1973), Showalter (1984) がそれぞれの出版年までの研究をまとめて評価、紹介している。そして、1990年代になって発表されたグリーンとハーレーの2論文で初めてアラブ文化の観点からアラブ人の行動が考察されるようになった。本稿はこの先行文献を発展させたものである。Griem; Hurley. アラブ人、アラブ文化は時代、地域によって多様な定義を許すが、本稿では、アラビア語を話し、イスラムの倫理や行動規範に従っている人をアラブ人とし、その人物の体現する行動様式、思考パターンをアラブ文化とする。ただし、北アフリカ (マグリブ) には、人種的、言語的にアラブ人と明確に異質なベルベル人が居住するが、イスラム化と長期間にわたるアラブ文化との混交により、本稿では彼らをもアラブ人の範疇に含める。アイケルマン、193頁～197頁。Peyrouton, pp.17～20. カビール人 (アルジェリアのベルベル系住民) の生態、自然観、世界観は宮治美江子 (1986) 参照。

(7) 「この男のばかげた罪は彼を憤激させる。しかし、この男を引き渡すのは信義にもとる行為だ。それを考えただけでも恥ずかしさに気が狂いそうだった」。ER., p.98; pp.261～262.

(8) *Ibid.*, p.90; p.250. 憲兵と同じく、ダリュはフランス政府の吏員であり、植民地行政の末端を担っている。それゆえ、本国からもたらされた救援物資の配給や、緊急時の囚人移送も、任務の一部であり、バルデュッシも囚人移送の委託文書を携え、ダリュに署名させた上で立ち去る。*Ibid.*, p.91; p.252.

(9) *Ibid.*, p.85; pp.243～244.

(10) *Ibid.*, p.88; 248.

(11) 保護領という支配体系を取ったモロッコやチュニジアのような他のマグリブ諸国と異なって、アルジェリアは早くも1834年にフランスに併合され、さらに1848年にはフランス本土と同様の行政単位が設けられ、アルジェ、オラン、コンスタンティーヌ3県が本国同様の地方県とされた。この制度によりアルジェリアでは植民者の自治が強化され、植民者や植民地生まれのフランス人 (pied noir) が増大するにつれて、彼らは自己の権益保護をめぐってフランス本国と鋭く対立するようになり、絶えず、分離・独立の動きを示していた。Peyrouton, pp.197-201, pp.268-276; Baroli, pp.134-151. 宮治一雄、63頁～65頁。

(12) 『異邦人』において、ムルソーは学生生活をパリで過ごし、上昇志向を持っていたが、アルジェリアに定着し、上司からのパリ転勤を断っている。*L'Étranger*, pp.68-69. 三野 (2002)、203頁。また「客」では、初期の執筆段階で、「ダリュは戦争の暴力に嫌気がさし、戦後、求めてアルジェリア山中の寒村に入り、教師をすることになったのだ」と書かれていた。Cf. Quilliot (1962), p.2042. この点では、ムルソーとダリュは出自こそ異なるが、共にパリが代表する都会を拒否し、フランス本国

- を忌避している。特にダリュはここでしか生きてはゆけないのだ。ER., p.85 ; p.244.
- (13) ダリュは2度にわたって男を詰問したが、その咎める口調は厳しく、ダリュ自身が驚いた程敵意に満ちていた。この描写により、暴力を嫌悪するダリュの人物像が確立される。Ibid., p.89, p.94 ; p.248, p.256.
- (14) 『異邦人』でムルソーを取り巻くフランス人はマリイ、レエモンのごとく固有名を持つ人物と、養老院院長、予審判事、教戒師、のごとく職務名で呼ばれる人物に2分される。三野は前者を母性原理、後者を父性原理の支配する社会と定義する。三野(2002)、224頁～225頁。鈴木は前者を親和的世界、後者を非親和的世界と分類し、さらに自然を対置させた。鈴木、13頁。常にダリュを「息子よ」と呼びかける憲兵バルデュッシは、『異邦人』における2種類のフランス人像を1つに収斂させた人物である。また固有名詞分析研究 (onomastique) を援用すると、Bal にヘブライ語の「パール (神)」、ducci にイタリア語の「甘い」の意味が指摘でき、この憲兵の本質的な「優しさ」を読み取れる。Cervo, p.222。一体に、カミュは語呂合わせ (pun) のような言葉遊びを好み、『追放と王国』の収録作品のタイトルにもその傾向が見て取れる。後述のように、hôte は主客双方を含意し、この作品のテーマを暗示させるし、「不貞 La femme adultère」の主人公は最後まで貞淑な妻のままであり、読者はそのタイトルに欺かれる。そして、「生い出ずる石 La pierre qui pousse」は、植物の如く成長し、同時に下向きに大きくなる石、という謎のような物体、鍾乳石、を題に持つ。植物と鉱物の特性の対比を収斂させた。Grimaud, p.181, fn.6
- (15) ER., p.87 ; p.245.
- (16) あるいは、裏切りにより処刑される運命を承知しながら食卓に付くイエスの「最後の晩餐」がイメージされているとも読み取れる。冒頭、ダリュが跪いて男の縛めを解いてやる動作も、イエスの足を洗うマグダラのマリアの姿を彷彿させる。このことは、当初、カミュはこの物語に「カイン」という題をつけており、「ヨナ」「不貞」が『聖書』と強いつながりを持つように、『追放と王国』の各編が『聖書』と深い関係を有すところからも裏づけられる。Quilliot (1962), p.2040.
- (17) ER., pp.95～97 ; pp.257～260.
- (18) Ibid., p.101 ; p.265.
- (19) Loc.cit.
- (20) キーヨらの研究者は、背景地理、人物像、物語内容の各面で、この作品がリアリステックであることを認めている。Quilliot (1970), p.103 ; Cryle, p.120 ; Showalter (1984), p.75 ; Picon, p.153. また新聞報道を基にカミュは着想を得たと報告する者もいる。Grobe, p.361
- (21) Showalter (1984), p.75. また前項に関して、「客」を現実政治に引きつけて解釈するよりは、汎人間的なテーマからの解釈のほうがよりテキストに則った研究となろう。Cryle, pp.122～124. また、『異邦人』や『ペスト』のアラブ人の表象に関して、カミュを人種差別主義者と非難するむきもあるが、本稿ではテキスト内の描写や発言と作者の意見を同一視する立場に立たない。Rigaud, p.184.
- (22) ER., p.89 ; p.249.
- (23) イスラムでは、飲酒の禁止と並んで、合法的な食品 (ハラール) が規定されている。なかでも豚肉、死肉、ムスリム以外の者によって屠殺された食肉、の食用禁止は厳格に守られている。ムスリムが食べて良い肉とは、ムスリムがビスミッター (神の御名によって) と唱え、頸動脈を切断したものである。『辞典』、「食文化」、「ハラール食品」。ラビノーはモロッコの村で、牛の首を深く切り付けなかったために牛に大暴れさせた情景を報告している。ラビノー、199頁～200頁。また、イスラム三大祭の一つ「犠牲祭」において、羊を屠殺し

カミュ「客」におけるアラブ人の表象

て近隣にふるまう慣習があるが、「幼い子どもたちが赤い綺麗なドレスを着て、輪になって羊が殺される光景を眺めていた。私達には、ぎょっとする光景ではあるが、じぶんたちの罪のかわりに犠牲となる羊を見るのは喜ばしいことと考えている人々にとっては、それは楽しいお祭りの光景なのである」と、塩尻は彼我の認識の相違を報告している。塩尻・池田、94頁。

(24) コーヒーの出荷港、モカ、を擁するので有名なイエメンでは、男性が常に短刀（ジャンビーヤ）を帯びて男らしさ（ムルーア）を誇示する伝統を墨守している。『辞典』、「イエメン」。アラブ社会における「男らしさ」の観点からすると、カミュの抱いていたギロチンに関する脅迫観念と、『異邦人』中のアラブ人の持つナイフとの連関は示唆的である。三野（2002年）、222頁～223頁。

(25) 十字軍とともに暗殺教団に関わる伝説は、ヨーロッパ人に、アラブ人やイスラム教徒を野蛮で暴力的というイメージを醸成させた契機をなす。暗殺者 assassin なる語の起源は、12世紀頃、ヨーロッパ人がイスマール派の一派に冠したことによる。この派の者は、若者に麻薬（hashish）を吸引させて酩酊させ、短剣を授けて要人暗殺を実行させた、と言われている。『辞典』、「アサッシン」。参照、ルイス『暗殺教団』。奇しくもクライルは作中のアラブ人にこの評語を付している。Cryle, p. 132.

(26) 『異邦人』の解説者の多くが殺人を犯したマルソーを聖人化するのは、マルソーの殺した相手が一人の人間ではないかのように書かれているからである」、と三野は述べる。三野（2002年）、242頁。マルソーと「客」中のアラブ人は奇妙な共通点を持つ。特に、自己を語らない、犯した罪を改悛しない、の2点で共通点を持つ。マルソーは「太陽がまぶしかった」から犯行に及び、男は「相手が逃げた」から殺したのだ。この両者の受け入れ難

い弁明にもかかわらず、その人間性に対して正反対の評価が与えられている。また量刑に関して、植民地化で、武装したアラブ人を殺害したフランス人が死刑を宣告されることが有り得ないのと同様に、食糧の貸借のもつれで衝動的に親族を殺害したアラブ人の身許引き受けを、執拗にフランス官憲が要求し、かつ安全な場所に身柄を移送する不自然さも指摘されている。Cryle, p.137; Hurley, p.83.

(27) ER., p.88; p.247.

(28) *Ibid.*, p.94; p.257.

(29) *Ibid.*, p.98; p.262.

(30) *Ibid.*, p.89; pp.248～249.

(31) *Ibid.*, p.97; p.260.

(32) Showalter (1984), p.79; Simon, p.289.

(33) 『追放と王国』に収録されている6編は、全て曖昧な結末を持つ。その典型は「ヨナ」に見られる。カミュ自身に擬せられる画家ヨナは、俗事に忙殺され、日々、芸術的創造力の減退を実感しているが、終にある日、キャンバスに向かうと、そこには連帯 *solidaire* とも孤独 *solitaire* とも両様に読み取れる文字のみが書かれていた。どちらでもあり、どちらでもない、二項対立のまま物語の幕は下ろされる。Cf., Fitch, p.32. このように、カミュ作品には常に「曖昧 *ambiguïté*」の評語がつきまとうが、曖昧の一語で問題解決を図ろうとするのは解釈の放棄に等しい。そして、その曖昧さはカミュの意図的な手法だと主張する研究者もいる。Miller, pp.39～41; Showalter (1984), p.78.

(34) 1990年代までの多くの研究者は、「客」をダリュのヒューマニスティックな面から解釈する傾向が強かった。その典型はサイモンの解釈に見られる。Simon.

(35) 前項とともに、研究者の大勢はアラブ人の無知、無理解に選択の原因を見出していた。前述のようにカミュ自身もそのようなアラブ人像を助長する

描写をしているが、本稿はテキストを厳密に読み返すことで、従来のアラブ人像を是正するのを目的としている。

(36) クライルの説であるが、アラブ人は長い植民地支配の結果、服従の姿勢を身に付け、常に指示されなければ行動できない受動的な行動様式を身に着けていると主張する。しかし、89頁で既に述べられているように、このアラブ人は反抗的な雰囲気気を漂わし、事態の推移を注意深く観察しているのだ。Cryle, p.127.

(37) サイモンらの説であるが、後述のように、男は『異邦人』のムルソーと同じく改悛の情を示さないが、それは、アラブ文化の観点にたてば、男は正当な行為を遂行したと自覚しているからである。Simon, p.290; Cryle, p.127.

(38) E.I., s.v., 'ird. 『辞典』、「名誉」、「寛容」、「歓待」、「親族関係」、「復讐」、「慣習」、「アサビーヤ」、「ムルーワ」、の各項参照。

(39) ER., p.87; p.245. Cryle, p.121; Grobe, p.361.

(40) バルデュッシュが犯行の様子をダリュに説明していた時、男は「不安な様子で眺めていた」し、ダリュから詰問された時には、ダリュが「お前怖いのかと」心配する位、「身をこわばらせ、目をそむけた」のである。ER, p.89, p.94; p.249, p.256. Cryle, p.128

(41) 注(38) 参照。アラブ人の行動原理は名誉心と恥辱という表裏一体の意識で貫徹されている。その名誉は寛大さや勇気といった徳性の発揮によって保持される。また、逆に自己や一族の権利が侵害され、名誉が失われた時には、全力を尽くして回復しなければならない。奴田原が報告するように、ベドウィンは「名誉のために全てを犠牲にすることを辞さないという」メンタリティを持ち、『「彼は妻と子供と恥（彼の父親が犯した不名誉な行為）と共に生きている』と言われるように、恥はそれ一代ではすまされず、後々まで人々の記

憶の中に引き継がれていく」のだ。奴田原、145頁。また、イスラムにおける貸与に関しては、『辞典』、「カルド（消費貸借）」参照。そして、アルジェリアの主要な民族集団であるカビール人の誇り高さは、彼らの貧困に喘ぐ状況を報道したカミュ自身が述べている。J.Rigaud, p.183, Camus, *La Misère de la Kabylie*, en Essais, pp.887~1018. また、逃亡して自由の身になる道を選ばずに、潔く法の裁きを受けに行く終結部のアラブ人の判断には、この名誉心も関与していたと考えられる。

(42) ER., p.94; p.256.

(43) *Loc. cit.* クライルが指摘するように、「客」には、アラブ人とフランス人の間の文化の差違と、両者間に兄弟関係・同胞関係 (liens fraternels) の不成立という2つの要素が書き込まれている。Cryle, p.125.

(44) *Ibid.*, p.127.

(45) ER., p.94; p.255.

(46) 沙漠の厳しい環境の下、太古より、沙漠の民には無条件で旅人を歓待する習慣があり、その行為は名誉心と結びつき、寛大さの指標となった。さらに、イスラムにおいて『コーラン』に次ぐ権威を有し、強制力を持つ『ムハンマド言行録（ハディース）』で、「客の権利」が定められたことにより、この慣行は宗教的強制力をもつようになった。またイスラムにおける5つの義務中の1つである巡礼により、イスラム世界では人の移動が活発で、この慣行はイスラム世界全体に広まっている。『ハディース』では、旅人歓待は3日とし、最後に1昼夜の旅に必要な水と食料を持たせること、と定めている。『ハディース』、V—348、459。

(47) 寛大さの指標としてハーティムという古来より寛大さで名高い人物が引き合いにだされる。堀内(1979)、104頁~123頁。またわが国の太田道灌の故事を彷彿させるアラブのエピソードは、ステトケヴィッチが報告している。J.Stetkevych.

カミュ「客」におけるアラブ人の表象

- (48) ラビノー、70頁～71頁、奴田原はベドウィンの旅人歓待における法外な寛大さの具体例として、アダーヤという慣行を紹介している。これは客人歓待の時、接待すべき食料がないと、了解なしに隣人の羊を殺して旅人に供す、という暗黙の措置を指す。奴田原、14頁。
- (49) Cryle, p.124. また、ここでイスラム教徒に課されている5つの義務のうちの1つである「断食」の意味を思い出してもよいだろう。イスラムは聖俗に境界を設けず、かつ、信徒間の平等を重視する。王侯、貴人から庶民にいたるまで、空腹の苦しみは等しく襲う。その苦しみに耐え、神の命令を遵守できた喜びをイスラム教徒は共有し、信徒の連帯を確認する。イスラム教徒にとって、断食は苦しい行為であるが、また同時に楽しい祝祭の時でもある。それゆえ、自分同様に、「腹がへったから」というダリュの一語は、このアラブ人に人間としての平等性を喚起させ、動物扱いをした憲兵とは異質の人間性をダリュに対して感じ取ったであろう。EI, sv., sawm; EQ., sv., fasting. またミューレシュタインはダリュの一連の行為を、彼がピエ・ノワールとして、アルジェリアで生まれ育ち、自然と身に付けた現地人の作法に帰している。Muhlestein, p.229.
- (50) *L'Étranger*, p.54. ハーレイは、カミュがたとえ親しい間柄であっても、vous で呼びかけられるのを好んだ事実を伝えている。Hurley, p.89.
- (51) グローブはフランス人教師とアラブ人を心理的なダブルの状態にあると考えている。Grobe, p.357. 文学作品理解において題名は重要な位置を占めるが、特にカミュ作品においては、タイトルの解釈は慎重を要す。注(14) 参照。『異邦人』において、誰が異邦人なのか、またその異邦人性とは何か、が問われている。三野(2002)、150頁。「客」において、ダリュは王国の「主人」であると同時に、アラブ人側から見れば、彼らは勝手に押しかけてきた「客」でもある。題名のこの両義性は示唆的であり、固定した視点からの解釈は常に誤解をはらむ。
- (52) ER., p.95; p.258. この台詞はまた、「われわれの仲間(叛乱者)に加われ」とも解釈できる。Cryle, p.128, pp.131～132.
- (53) S.P.Stetkevych. ラビノー、70頁。Cryle, pp.131～132.
- (54) ER., p.100; p.264.
- (55) *Ibid.*, p.95; p.257
- (56) *Loc.cit.*
- (57) 『ハディース』では、行き過ぎた歓待を戒めるために、歓待は3日までと定めている。三日目には主人は水と食料を与えて客を送り出すことになっている。ダリュが別れ際に、男に金と食料を与えたのは、このアラブの慣習を彷彿させ、この事も一因となって、男は歓待の返礼として主人の意に副う選択(留置署への道)をした、と解することができる。注(46) 参照。
- (58) ER., p.97; pp.260～261
- (59) *Ibid.*, p.96; p.259.
- (60) *L'Étranger*, p.80.
- (61) 『異邦人』と「客」における自然描写の分析はFortier とChaulet-Achour (pp.147～160)を参照。それぞれイメージ分析と、文体上の特徴であるリリズム分析を行っている。またカミュ作品全体を対象にしたイメージ分析に関してはMailhotの大著参照。
- (62) ER., p.99; p.263.
- (63) 「客」のイメージ分析はフォルティエが行っており、太陽、沙漠、雪、山地は、それぞれこの小説の中心テーマである「分離 séparation」と「中間地帯 zone intermédiaire」を表していると結論づけている。cf., Fortier.
- (64) 社会学の鼻祖に擬せられているイブン・ハルドゥーン(1332年～1406年)は、定住民(ハダリー)と

岡 崎 桂 二

遊牧民（バダウィー）が相互に異質な世界を形成していることを指摘した。『歴史序説』、第1巻、第2章「田舎や砂漠の文明」。「客」解釈において、遊牧アラブと定住アラブの相違を指摘したのはグローブが嚆矢であり、次いでハーリーが詳述した。Grobe, p.361; Hurley.

(65) 堀内 (1979)、17頁～18頁。

(66) アイケルマン、21頁。またカミュはアルジェでの新聞記者時代、カビール地方の飢餓に関する長文のレポートをものしている。注(41) 参照。カビール人とベルベル人に関しては宮治美江子の3論文を参照。

(67) アラブ人は伝統的に親族の結束が強く、また強固な一族の連帯意識（アサビーヤ）を持つ。この連帯意識が名誉保持の精神と結びつき、権利が侵害された時に、速やかに自身や一族で処理して名誉回復を図ろうとする。特に、身内の女性の性に関わる不祥事が起きると、親族が自ら当該女性を処罰するという慣習が、現在でも多くの地域で残っている。この行為は「名誉のための殺人」と呼ばれ、数々の悲劇的な事例が報告されている。このような場合、警察当局は関与できないか、黙認する場合が多い。このことから考えても、「客」のアラブ人は従弟を殺害したので、その処分は、身内同士の話し合いで決着がつく可能性が高い。サーダウィ、55頁～57頁、358頁～360頁、塩尻・池田、148頁。

(68) ER., p.88; p.248.

(69) *Loc.cit.*

(70) アラブ・イスラム社会では窃盗、殺人、姦淫、等には身体刑が課されたり、同害報復（キサース）が実行される地域があるが、当事者同士の話し合いや「血の代償金（ディヤ）」の支払いによって、厳しい処罰を回避しようとする一般的な傾向がある。これは殺傷事件等が生じた場合、その損害に相当する物品や金銭で代償する制度である。無限

に続く同害報復による生活上の支障を取り除こうとする知恵である。堀内 (1986)、402頁～404頁。

EI., s.v., diya. このような点を考慮すれば、男は同害報復を恐れてフランス警察への道を選択したとするグローブらの主張は説得力に欠ける。食料の貸借が元で争いになり、逃亡しようとした親族を殺害した者は、この点を考慮すれば、親族間の調停にかけられて、同害報復を免れる可能性が高いであろう。ゲルナー、256頁～257頁、260頁。Grobe, p.362. また、アルジェリアの民族独立運動の一因は、イスラム法に代えてフランス法を全面的に適用した点にある。宮治一雄、66頁～67頁。アルジェリアにおける法的状況は、Raymond 参照。

(71) Showalter (1984), p.78. 自己の犯した殺人事件の処理に関して、部族内で調停が進行していたならば、貧困ゆえに血の代償金は払えぬであろう。その場合は同害報復の刑が待つ。それを逃れるには部族からの追放しか道はない。

(72) ER., p.101; p.265.

(73) ペリンらはダリュと別れた後、男は仲間と合流すると解釈する。この解釈を成り立たせるためには、男は無知を装ってその本心を隠し、受動的な態度を取り続けた強固な意志を持った人物でなければならず、「客」は全く違ったテーマの作品に変貌する。トッドの証言によれば、カミュは執筆当初、「客」と「不貞」のアラブ人の心理を少々単純化してバラ色に描いたというが、決定稿において、アラブ人のイメージが大幅に変更された訳ではない。Perrine, p.54; Showalter (1984), pp.78～79. トッド、下巻、321頁。

(74) ER., p.86; p.245.

(75) *Ibid.*, p.96; p.259.

(76) *Ibid.*, p.97; p.260.

(77) *Loc.cit.*

(78) *Ibid.*, p.99; p.262.

カミュ「客」におけるアラブ人の表象

- (79) *Ibid.*, p.89 ; p.248. 勿論、憲兵の証言が伝聞に基づき信憑性が低いことは認めなければならない。しかし、アラブ人が憲兵をも欺く知恵と勇気を持ち主とするならば、この作品は全く別な様相を呈し、またテーマも全く違ったものとなる。注 (73) 参照。
- (80) 「男は小屋に向かって開く奥の扉へと進む。……あいつはおもてへ出たのだ。すると、かすかな水音が響いてきた (Un faible bruit d'eau lui parvint)。…… (男が) 寝床に戻ったときになって、はじめて、その音が何であったかを悟った」。 *Ibid.*, p.97 ; p.260. 翌朝、ダリュは男を小屋に連れて行き、蛇口の場所を教えて男に洗面をさせている。これから判断して、小屋には便所があることは明らかであろう。
- (81) *Loc.cit.*
- (82) Showalter (1984), pp.77~78.
- (83) ER., p.97 ; p.260.
- (84) *Ibid.*, p.99 ; p.262.
- (85) Rooke.
- (86) Miller.
- (87) Grimaud, p.181, fn.11 ; Cryle, p.132.
- (88) 「客」の決定稿以外の異本はプレイヤード叢書版、2041頁~2044頁、参照。カミュは当初、『転落』をテーマ的に同質の作品集『追放と王国』に収載する意図を持っていたが、『転落』の分量を勘案して、別稿とした。また『追放と王国』の諸編も、そのタイトル、収載順序、の両面で随時変更されている。Cf., Sterling, p.525, fn.4 ; Quilliot (1962), pp.2041~2042.
- (89) *Ibid.*, p.2043. 13才と明記されているが、同時に幼児、児童を意味する *enfant* という語が使われて残酷さを強調しようとしたが、決定稿では削除された。また、「神の思し召しだ Dieu l'a voulu」という表現はアラビア語で *in shā'a allā* と言い、アラブ人の常套句の一つであり、その原義は最早意識されないままに口癖のように頻繁に用いられる。しかし、非アラブ人にとっては、この表現は全てを神の責任にゆだね、自己責任の回避と解釈されて常に相互の誤解や不信を招く表現である。手近の旅行やビジネスのガイドブック、中東紀行には必ず記されているであろう。一例として曾野綾子『アラブの格言』、新潮社、2003年、4頁~7頁、を挙げておく。『辞典』、「イン・シャー・アッラー」。Sterling, p.526, fn.7.
- (90) アラブ・イスラム社会において、大人と子供を分ける一つの指標として、割礼がある。時代、地域において割礼を受ける年齢は異なるが、通常2~10才位の間に行われる。『辞典』、「人生儀礼」。親の監督下に置かれるとはいえ、割礼を受け、礼拝、断食に参加する者は、一人前のムスリムとして遇される。宮治はカピリー地方のフィールドワークにおいて、当該地域では、15、6歳になり、心身ともに成長し、30日間の断食を厳守した後、成人の宣言を行って正式に村の評議会のメンバーになると報告している。宮治美江子 (1987)、205頁、注4。また柳橋はイスラム法の見地から、人間の成長は、授乳期、監護期、保佐期、自立期、に分けられるとするマーワルディー説を紹介している。この監護期は子が弁識能力を備えるまで続き、通常、7~8才に達した時点で備われているとされている、と述べる。また保佐期において、子は教育を受けて自立する能力を身につけることが予定されている、とするイスラム法の見解をも紹介している。柳橋 (2001)、559頁。
- (91) Quilliot (1962), p.2012.
- (92) Cryle, p.122, p.131 ; Roelens, pp.6~7.
- (93) Quilliot (1962), p.2014.
- (94) ER., p.95 ; p.257. Daru refuses to follow the orders. He reaches that decision *promptly* and tells Balducci bluntly : But I won't hand him over. Showalter (1980), p.80 ; Daru decides

岡 崎 桂 二

almost *instantly* to take responsibility for the prisoner but not to hand him over. *Ibid.*, p.81.

イタリック強調は本稿筆者による。また、マクダーモンも同様の見解を示している。McDermont, p. 11.

(95) キャンベルによると、この話はレバノンのジェスウィット教団が信徒のモラル教化のために『アルマシュリク *al-Mashriq*』新聞に1910年に掲載されたもの。Campbell.

(96) 三野 (2003), 170頁。